



11月のお知らせ

保育理念	受ける愛	与える愛
—愛されていることを知り・愛する者となるために—		

「感じる心の大切さ」

一雨ごとに秋の深まりを感じる頃となりました。先日は、子どもたちと共に春に咲く花や球根植えのための花壇準備をしました。こどもたちは、まだきれいにさいているなつのはなばなをつみあつめては、「おかあさんにあげるの」と大事そうに抱えていました。その傍らで保育者たちは、「お母さんは、ありがとう。嬉しい！って言ってくれると思うね。」などと話しながら花束作りをしていました。大好きな人にプレゼントしたいと、心を動かしている子どもたちの表情は、穏やかで優しさに満ちていました。

さて、今月の主題は「感じる」です。幼児期は、五感たくさん使う経験が大切とされていることは、みなさまもご存じのことでしょう。脳の発達から見ると、幼児期は右脳優位（感じる）と言われ、小学校入学する頃から左脳優位（考える）に長けてくると言われているからです。好きだから夢中になる・不思議だから調べる・友達と一緒に遊ぶことが楽しい・仲良くしたいから相手を思いやる・新しいことや珍しいものには興味津々・なんでも触ってみたいくなる・・・子どもたちは、直接的、具体的な体験を通して豊かな心情、意欲、態度を培い成長、発達していくのです。生物学者のレイチェル・カーソン女史「センス・オブ・ワンダー」（新潮社・上遠恵子訳）本の文章に下記のように記されているところがあります。

『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要でないとい固く信じています。
子どもたちが出会う事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。
幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

神秘さや、不思議さに目を見張る感性は、その後の「学び」に繋がっていくというのです。大人にとっては当たり前のことでも、子どもにとっては初めて知ったこと、発見したこと、不思議でたまらないことなのです。その驚きや発見を「すごいね。どうしてかね。どうしたらこうなったのかね。」等と子どもたちとのやり取りをしながら、楽しんでくれる身近な大人がいて、「共感すること」の体験の積み重ねが大切と思うのです。ご家庭でも子どもたちが、園生活の中で体験を通して感じたことを、子ども自身の言葉で伝えようとしているときには、少しだけ耳を傾けて「それでどうしたの、そうだったんだ不思議だね、面白いね」とお子様の思いに共感して頂ければと思います。このことにより自分の思いを受け止めてもらえたと感じ、満足感や安心感を得ることでしょう。

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」(ヨハネによる福音書15:12)

「たった一つの愛」

この世界には「愛」という言葉が溢れています。小説や音楽で常にテーマとなるほどに、私たちは愛を求めているのでしょうか。しかし、愛や愛するという言葉の意味を知っている人は、どれくらいいるのでしょうか。辞書で「愛する」の意味について調べてみたら「かわいがり、いつくしむ。愛情を注ぐ。」という説明が出てきました。愛について説明するためには「愛」という言葉を使わざるを得ないようです。やはり愛の中身は分かりません。そのこともあり、同じく「愛している」はずなのに、みんながみんな違うことをしています。愛するということの中身についての理解が人それぞれに委ねられてしまっているように思えます。ですから、相手を愛しているつもりが、「自分の都合のいい愛し方をしている」だけになり、むしろ相手を傷つける事さえ起きてしまうのです。人は自分が愛されたようにしか愛することができません。体験したことのない愛を生み出すことはできません。だからこそ、私たちは本当の愛を知る必要があります。

小さい頃、父の教育方針もあって空手の習い事をしていた時期がありました(ポケモン見たさに短期間でやめてしまいましたが・・・)。習い始める前は当時読んでいた漫画やヒーローもののように、サンドバッグをボカスカ殴ったり、人と実戦形式で戦ったり、かっこいい技(昇竜拳、かめはめ波、真空竜巻落とし etc)を次々と編み出したりするんだろうな、なんて考えていました。しかし、実際に入会しますと、ストレッチ、ランニング、そして型の練習という何とも地味なプログラムで終始していたのです。「こんなのつまらない!もっと戦ったりできるのに!」とずっと思っていました。そんな態度で練習をしていた私は、ある日行われた昇級の試験で醜態をさらすことになります。型を十分に披露することができないだけでなく、先生相手の組手ではただ闇雲にパンチやキックを繰り返すばかり。友達はあるな上手に戦っているのに!自分がこんなにも何もできないことに、そこでようやく気付いたのです。私たちはどこか自信家で、「自分は十分人を愛せる!習う必要なんてない!」と思い込んでいたかもしれません。しかし、愛することの難しさをどこかで経験するはずです。しっかり、愛の根底にあることを学び、自分自身に向けられている愛に気づく中で、愛を実践できる心と体が養われていくのです。イエス様はそのために私たちを招いておられます。

今日の聖句の「わたし」とはイエス様のことです。イエス様があなたのことをどのように愛してくださっているか、知っていますか?イエス様はあなたのために十字架で命を捨てることによって、愛を示されました。あなたのためならば全てを捨てていいって仰るのです。見返りなんて求めません。ここに本当の愛があります。私たちの身勝手な愛とは違います。自分が不利益を被ったとしても、傷ついたり、報われないこと、死ぬことさえあったとしても相手がまっすぐ、幸せに生きることを願う。私たちはこの大きすぎる愛を全うすることはなかなかできません。しかし、既に自分がイエス様によってこれほどまでに愛されていると知ることができたならば、これまでがどうであろうとも、今までとは違う愛に一步、踏み出すことができるのではないのでしょうか。



チャプレン 吉川光太郎